

コロナ5類移行1カ月

見えぬ感染 拭えぬ不安

「おおこし」が運営する高齢者施設では、パーティションを置き、職員(右端)がマスクを着用するなど、従来からの感染対策を継続している = 7日、千葉市若葉区



千葉市若葉区を中心に入所と通所型の介護施設などを運営する「おおこし」。大越崇司専務(41)は「感染リスクは以前より高まっている。施設内での危機感が増している」と警戒を強める。

同社は毎日発表されてきた感染者

高齢者施設

週報「動向把握しづらい」

新型コロナウイルスの5類移行から8日で1カ月を迎える。高齢者施設や医療機関からは、移行で生じたさまざまな変化に不安の声が上がっている。基礎疾患を持つ高齢者が多く利用する千葉市若葉区の高齢者施設では、毎日の感染発表がなくなり「感染動向がつかみづらい」と心配を口にしている。同市美浜区のクリニックでは感染への警戒が緩まり、インフルエンザなど別の感染症の患者が急増している。

数を施設運営の参考にしてきた。緊急事態宣言発令とまん延防止等重点措置適用時は、家族の面会を中止。それ以外の時期は、県内の新規感染者数や新規クラスター(感染者集団)の発生状況を基に毎月、面会実施の有無や参加人数の制限などを決めていた。

しかし、5類移行に伴い、毎日の感染発表が週報に変更され、クラスターの発表はなくなった。大越専務は「週報を面会や外出を許可する目安にしているが、感染動向がつかみづらくなっている」と悩ましている。

同施設は、職員のマスク着用や利用者が食事などに使う机へのパーティション設置、通所者の人数制限など従来通りの感染対策を継続。高齢者をコロナから守るため、気の抜けない毎日が続く。

行動制限がなくなり、学校をはじめとする社会全体で進む「脱マスク」に理解は示すが「施設内に(感染を持ち込んでしまう)不安は常に感じている」と打ち明けた。